

# 2016 年度 センター試験 地学 (本試験) 分析

## 全体概況

試験時間 60 分

大問数・解答数	大問数：6 題	解答数：30 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化    ○ やや難化	● 変化なし    ○ やや易化    ○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加	● 変化なし    ○ 減少
出題分野の変化	● あり	○ なし
出題形式の変化	○ あり	● なし
新傾向の問題	○ あり	● なし
<p><b>総評</b>                  大問が1題減少し、必答問題 4 題、選択問題が1題の計 5 題構成となったが、解答数の変化はなかった。昨年出題された「火成活動と火成岩」は選択問題としては出題されず、その代わりに第 6 問で「宇宙の膨張」が出題された。このため、第 6 問を選択した受験生にとっては、全体として「宇宙」に関する配点が上がる結果となった。問題レベルに関しては、図やグラフの読み取りの正確さが要求されるなど、昨年度に引き続き受験生には難しく感じられただろう。</p>		

## 大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	地球の内部構造 A-活断層 B-沈み込み境界とホットスポット C-残留磁気とプレート運動	27 点	標準的な問題である。A は活断層に関して図をもとに選択する問題。B は震源の分布を推測させる問題。C は地磁気に関する知識問題であった。いずれも教科書を理解することで解答できる内容であった。
第 2 問	地質と岩石	17 点	地質図の読解力と、岩石・鉱物の知識を必要とする問題であった。中でも日本列島の歴史を答えさせる内容があり、十分な対策を行っていない受験生は解答しづらい内容だったと推測される。
第 3 問	大気と海洋 A-大気と海洋による熱輸送 B-潮汐	27 点	標準的な問題であった。A はグラフから熱輸送の状況を読み取る問題。B は潮の満ち引きに関する知識問題であった。教科書を理解することで十分対応できたと思われる。
第 4 問	地球と恒星 A-地球の運動 B-恒星	17 点	A は地球の運動に関する知識を問う問題。B は恒星の性質に関する知識問題であった。B の問 5 のような計算問題は、近年出題されていなかったため、過去問対策だけでは対応しにくかったと思われる。
第 5 問 選択	地球の大気と鉱物 A-地球とその大気 B-鉱物	12 点	A は原始地球の知識問題。B は鉱物に関する知識の問題であった。いずれも取り組みやすい問題であったため、確実に得点したい内容であった。
第 6 問 選択	宇宙膨張	12 点	恒星の知識やグラフの読み取りから宇宙の状況を推測させる問題。宇宙の膨張と大きさを絡めての出題は比較的珍しいため、戸惑った受験生もいたと思われる。